

リンゴが平岸で盛んになったのは

気候が合っていたことと土壌がリンゴに適していたことですね。リンゴの木の根は土の奥まで入っていないので、日照りに弱いのですが、平岸の土壌は、水を撒く必要がなくていいです。また、リンゴの栽培の研究で「リンゴの神様」と言われた北大の島善鄰教授の指導も大変大きな力だったと思います。

戦後リンゴが高値でよく売れたそうですが

日持ちもいろいろ、味も良かったから売れたのだと思います。余市のリンゴと食べ比べても、味は勝っていませんね。

糖度のある大きめのリンゴは、すぐに売りに出し、酸っぱくて小さいリンゴは、収穫してから年内の間、倉庫の中に貯蔵していました。石造りのリンゴ倉庫は、夏は涼しく冬は暖かいことからリンゴの保管に最適でした。貯蔵したリンゴは糖度を増して、年が明けてから

でもおいしいリンゴを出荷でき、高く売れました。

平岸のリンゴ農家は、当時の長者番付に名を連ねる

ほどで、札束をリュックに詰めて、税金を払いに行つたとまでいわれていました。

盛んだったリンゴ園がなくなっていたのは

リンゴの木の大敵であった「腐乱病」によって木が侵されていったことやその対策に難儀したことが一番の原因だと思いますね。それに加えて、札幌市が戦後急速に発展してきて、

昭和三二（一九五七）年の木の花団地の建設に始まり、札幌市から至近の平岸が、



木の花団地誕生前のリンゴ園（昭和30（1955）年ころ）

昭和三十年代から、宅地化していったことも大きな原因だと思っています。

さらに、リンゴの木は、植えても、成長するまで十年も十五年もかかるなど、大変手間のかかる木でした。そのため、後継ぎは、札幌市内に勤めるようになり、やがてリンゴ農家はリンゴ園を手放していきました。同時に、平岸に数多くあったリンゴ倉庫も次々と取り壊されてしまいました。

当時の面影を残すものは

数少ないリンゴ倉庫が当時の面影を残しています。その中のひとつに、「YOSAKOIソーラン祭り」で有名な「平岸天神」が練習場として使っているリンゴ倉庫「平岸太鼓道場」（平岸三条三丁目）があります。現在では、残ってほしいと思っていたリンゴ全盛期の建物も簡単に壊されてしまい、とても残念です。平岸のリンゴ倉庫は、リンゴ園の歴史を伝えるものなので、いつまでも残ってほしいですね。

そのほかリンゴ倉庫を活用した建物は

現在、喫茶店「沢田珈琲店」（平岸二条六丁目）として利用されているリンゴ倉庫があります。もともとは、地元のリンゴ農家の団体が、共同選果場として昭和十二（一九三七）年に建てたものでした。けれども、多くの農家が、自前の倉庫から出荷したので、選果場としては使われず、実際には集会場などとして使われていましたね。

昭和三四（一九五九）年には、7人のリンゴ農家が出資して（株）平岸会館を設立し、運営を行うことにしました。最初は、農協に貸していましたが、契約が切れ、一時期は売却の話もありました。けれども、先輩方が苦労して建設したものを簡単に処分するのは忍びない、



石造りリンゴ倉庫の「沢田珈琲店」正面（平岸2条6丁目）

リンゴ倉庫の雰囲気を残して使ってもらいたいと思い、借り手を探すことにしました。

その後、喫茶店として利用したいとの話があり、平成四（一九九二）年からは、「沢田珈琲店」として使ってもらっています。建物は、一階の天井を撤去して二階までを吹き抜けとし、屋根裏も見えるなど、とても良い雰囲気になっています。先輩方が努力してできた建物を生かすことができました。うれしく思っています。